



東九州支部報

八丁原 ヴューホテル

日本山岳会
九州五支部集会
平成21年11月7日 主催：東九州支部



九州五支部集会 (八丁原ビューホテルにて) (11月7日)

九州五支部集会筋湯で開催 記念山行は涌蓋山へ

飯田勝之

日本山岳会の九州五支部集会が、去る十一月七日(土)、八日(日)筋湯温泉で開かれた。この集会は九州にある日本山岳会の五つの支部(福岡支部、熊本支部、宮崎支部、北九州支部、東九州支部)が毎年持ち回りで開くもので、今年も東九州支部が主催の順番である。この日の集会には本部からの参加者も含めて合計三十八名が参加し、初日(七日)は懇談会・懇親会、二日目(八日)は記念山行が行われた。

九州の岳人たちの交流の場

里では暖かな秋の日々が続いたせいもあって木々の色づきも遅く、紅葉の時期にはまだ早い十一月七日、飯田高原はかしもう秋の盛りを迎えていた。九重・筋湯温泉の「八丁原ビューホテル」に日本山岳会の九州の岳人が集まった。九州四県・五支部の集会であるが、北九州支部には山口県の会員もいるので、五つの県から集まった会員たちだ。

午後四時から懇談会の開始。会員、飯田の司会進行で始まり、開会にあたって先ず梅木東九州支部長が「五支部の交流の場として有意義な集会にして頂きたい。九州の登山のメッカ九重で温泉と山を楽しんで頂きたい。来年は東九州支部創立五〇周年を迎え、記念行事も予定している。是非またおいで頂きたい」と歓迎の挨拶をして、続いて本部から出席した岡部統常務理事が来賓挨拶で「本部は四つのプロジェクトを組んでいる。課題は日本山岳会の高齢化が進んでいることで、

《 も く じ 》

九州五支部集会	1
忘年登山・忘年会	2
九千部山・石谷山・城山	4
女鞍岳・観音岳	5
視覚障害者支援登山大会	6
七年山	6
アルプス旅行記④	7
九州脊梁山地縦走の報告③	8
九重の自然を守る	9
私の無名山ガイドブック 40	10
お知らせ	10
後記	11

放置すれば会の消滅につながる。若い会員を増やすよう努力が必要だ。公益的事業の展開など、法人改革も具体的検討時期にきている。

『山の日』の制定運動もプロジェクトの一つで、こうした課題をみんなできなしてあげていきたい」と述べた。このあと各支部の活動報告がなされたが、各支部長の報告が予定より大分長くなり、最後には時間がなくなりましたので、梅木支部長が支部報告と、そのあと予定していた講話「大分・四方山話」をうんと短縮して一緒に済ませるといふ展開となった。

懇談会のあと参加者一同温泉に入ってあったまり、午後六時から懇親会となった。懇親会は、加藤会員の司会で進行。先ず梅木支部長の挨拶のあと、参加者の最長老である北九州支部の吉村会員の音頭で乾杯となった。この乾杯にあたっては、その前に同会員の希望によりお話しも聞くことにしていたが、氏の若き日の想い出話が長くなり、司会者が途中で乾杯を先にして頂くようお願いする場面もあった。

ともあれ、なごやかな宴はすすみ、ホテルオーナーの甲斐(良)会員が歓迎の挨拶などをして、各支部がそれぞれ順番に出し物を披露。最後の順番の東九州支部は参加者が一人づつおしゃべりや出し物を披露。宴たけなわでは炭坑節を参加者全員で踊ったりして、最後は『坊ガツル賛歌』の全員合唱

と一本締めで締めくくり、お開きとなった。

ついでに 涌蓋山へ

二日目は記念山行で、行き先は涌蓋山。参加者二四名を二隊に分け、A班(福岡、熊本、宮崎支部)を加藤、下川、中野支部員がリード、B班(北九州支部)を飯田、甲斐(良)、佐藤(秀)支部員がリードすることとなった。午前八時一五分、八丁原ヴェーホテルをA班から出発。疥癬(ひげん)湯の登山口まで一五分歩き、



涌蓋山頂にて

橋を渡って対岸の広場へ。以前はここに疥癬湯があり、家の土間を通って裏の登山道へと続いていたのだが、年の台風で川が氾濫した橋も家も流され、橋は架け替えられたが家は今はない。広場のすみに温泉のあとが残るだけである。広場から木立の中の急な登りにさしかかる。谷間を吹く風にはらはらと木の葉が舞う中をゆっくり登っていく。林の中を登りきると平らな舗装の小道になり、直ぐ先からこの登山ルートの特徴であるスキの中の道だ。女性会員の参加者のおい北九州支部は、絶えずにぎやかな会話が続き、ひげん湯から約四〇分、稜線の肩に出ると

スキの原野の前方に涌蓋山が見えてきて、展望も開けて参加者から歓声が上がる。九時三〇分、牧草地の三叉路で小休止。大きく波打つ稜線の草原の向こうにみそこぶし、一目山が見え、振り返ると煙を上げる硫黄山を中心に九重の山塊、飯田高原の向こうには双子峰の由布岳、左手遠くには英彦山まで見える。めざす涌蓋山はまだ遠い。草原を過ぎ、ヒノキ林を通り、林

道に出たら涌蓋越だ。時刻は九時四五分。樹林の中の緩斜面を過ぎて、急な登りになると視界も開けてくる。胸突き八丁の上りが続く。一〇時一五分に雌岳着。ここでひと息入れて最後の登りにかかる。一〇時四〇分涌蓋山頂上到着。素晴らしい秋晴れのもと、三六〇度の大展望に参加者一同大満足。しばし展望を楽しみ、全員そろって記念写真を撮り、時刻もまだ早いので昼食は下山途中でとることにして十一時に下山開始。涌蓋越を過ぎて樹林を抜けて牧草地の広場に出たところで昼食休憩となった。時刻は十一時五〇分だ。穏やかな日ざしの中、みんなが同じ弁当を開く。弁当は同じだが飲み物はそれぞれ違う。しばし、なごやかな昼食休憩のあと、午後下る。ゆったり、のんびりの山歩で良い。

平成二十一年、忘年山行と忘年会 雪の木山内岳・新百姓山

加藤英彦

去年のキーワードは「政権交代」であったが、我が支部はこの一〇年変わらずに、忘年山行と忘年会には重廣恒夫さん(JAC関西支部長)との交流をかねて行っている。平成二十二年から行っている交流忘年会も、今年がちょうど一〇回目となる。例年一二月第一週に行っているが、今年は重廣さんの都合が悪く、第三週に延ばした。そのため、この間にこの冬最初の寒波が到来し、それが良かったのか、久方ぶりに雪を楽しみ山行となり、またいろいろ学ぶことの多い忘年登山となった。以下その報告。

木山内岳へ

一二月一九日(土) 早朝、事前移動。(重廣さんは前日(一八)に連絡し合ったおりの配車でその日に大分入りして、津波戸山を所「うめりあ」に集合。車五台、済ませている)

一五名の参加である。ここで重廣さんが挨拶して登山口の藤河内へ移動。(重廣さんは前日(一八)に大分入りして、津波戸山を済ませている)

藤河内溪谷の駐車場で全員そろって、重廣さんの指導でストレッチ体操。今日一日のために身体をほぐす。初参加の渡辺夫妻を紹介して八時一〇分に出発。藤河内溪谷沿いの崖に架かる遊歩道を通じて登る。一昨年の台風で崩落して去年の四月一九日に木山内岳へ登った時には通れなかった橋が立派に修復されていた。(この件は、私が大分合同新聞の記者に伝えて記事(四月二四日)にしてもらったが、それがもとで佐伯市が修復工事を急いだと聞いている)

竝松谷の水音を左手に聞きながら落ち葉を踏みしめての登りである。登るにつれてところどころ氷が見られ、スリッパに注意しながらの歩行となる。観音滝が近くなり、標高八〇〇mを越えるあたりから雪があらわれてくる。二日前からの寒波の襲来で降った雪だ。観音滝の横を巻く急な登りあたりから雪が増えてくる。

崩落の橋の整備と同時に登山道と標識の整備もしたので、この直登コースには以前はなかった木製のハシゴやロープが新たに設置されている。雪の急斜面を滑らないように注意しながらの登りである。登りきって滝の上の谷を渡ると、雪はいっそう深くなる。倒木を潜ったり越えたりしながら谷沿いの道を、高巻きしたり、谷に降りたりしながら登っていく。ルートはずれないように集中しながら、雪に埋もれたルートを探りながらの登りである。

やがて、大きなシオジの木が二本ある谷の分岐に標識があり、右が喜平越につきあげる谷だ。この小谷沿いに登る道は雪が多く、滑りやすく手こわい登りとなる。数名は谷からそれて、右の斜面を登っていくが、本隊は登山道ルートに沿って登る。後続を待ちながら、ゆっくり登り、何とか喜平越に登りついて休憩。ここから、若手二人と重廣さんが前を行くラッセル隊となる。先頭と最後尾とかなり開いてしまったが、一二時三〇分、全員木山内岳に到着。積雪は一五c mほど。

(木山内岳山頂にて)



ここで昼食とする。そのあと、『チャレンジ四〇〇〇』の横断幕を前に全員で記念写真を撮ったあと直ぐに下りにかかる。雪の下り

は大分時間がかかりそうなので、ゆっくりしてられない。アイゼンを持ってるのは装着して出発でも遅れるものが出て、パーティが乱れてくる。ここからの下りはいっそうスリッパの注意が必要となる。このため、重廣さんが唯一の女性である渡辺夫人の腰をザイルで結び、アンゼイレンで確保し、後ろからルートを指示しながらの下降となる。ハーネスやザイルを素早く出して装着するあたりはさすが重廣さんだ。

(重廣さん、渡辺さんのアンゼイレン anseilen【独】)



下りは、登りにとった小谷沿いの正規のルートではなく、別動隊が登った斜面のトレールを下る。一歩、一歩確実に足下を確保しながらの下りとなる。谷に下りつく

滝の上へつくと、ここからの下りがまたいっそう注意を要する。滝の横に降りたら、ちよっと観音滝を見て直ぐにまた下る。雪がなくなるまでザイルはつけられたままだ。ザイルで確保されながらの下りは、初めてで大変良い体験になったであろう。雪山の経験のない者が初めての雪で、体力面のきつさや、スリッパに注意しながらの登降など、いろいろ良い体験になったようだ。

藤河内の登山口には午後四時過ぎの全員到着となった。冬の夕方は早い。直ぐに藤河内の「湯トピア」へと下るが、ここは冬場で閉鎖中。そのまま木浦の温泉館をめざす。この風呂は狭いので、交替で入浴することとなり、時間を要する。風呂のあとは三々五々今夜の宿「梅路」へ。

忘年会

民宿「梅路」の宴会は別棟の囲炉裏ばたである。大きな炭火を囲んで、大きな網の上に肉や野菜を焼きながら杯をかわすという野趣あふれる宴会である。久しぶりの雪山で疲れた身体にアルコールが絡うって、炭火焼きに猪鍋や猪汁鹿刺し、地鶏腿焼き、そして珍しい狸汁まで出る。野菜もいろいろあり、特にシイタケの焼いたのがうまい。カッポ酒やカッポ焼酎・、最高にうまい。

宴も盛り上がり、みんな順番に

重廣さんに質問して答えを求める。そんな中、アイゼンに関する質問(囲炉裏端の宴会)



に重廣さんが一言『道具は命にかかわるものだから、慎重に良いものを選んで使うことが大切だと思います』と、味のある忠告でした。宿の用意した福引き抽選もあり、いろいろな景品に喜び、飲むほどに歌もとびだし、民宿の主人の米田さん自ら木浦の歌を披露するなど、ますます盛り上がりつつあった。

二次会は囲炉裏を終わって部屋のかたつを囲んでまた盛り上がり、ふすまに書いた歌詞で『宇宙の唄げんか』の披露や、炭つけまつりや、木浦鉱山の歴史も教えられたり、午後十一時まで続いた宴会も、お開きとなった。

新百姓山へ

翌二十日(日)、朝六時三十分起床。朝食を待つ間に『梅路』の女将、寿美さんの美声で正調『宇目の唄げんか』を聞かせてもらった。女将はこの唄のコンクールで何度も表彰されたというだけあって、歌唱力は抜群で、哀愁をおびた歌いまわしは素晴らしかった。朝食は珍しくおにぎり二個が出され、ウナギがのつてるおにぎりは美味しかった。

(民宿【梅路】にて)



民宿の前で主人や女将も入って全員で記念撮影して、七時五〇分に出発。杉ヶ越トンネルの宮崎県側に駐車し、今日も重廣さんの指導でストレッチを終えて出発する。やや風はあるが、天気はどうやらもちそうである。杉園神社から稜

線を登り始めると雪があらわれてきた。登るにつれて深くなっているが、二日目となると雪道にも慣れたのか登るペースも昨日より確実にスムーズになってきている。いくつとなく登っては下り、また登っては下りで小ピークを越えていく。左手下方の雪の斜面を駆け下っていく鹿、数匹の群を見た。ヒメシヤラの美しい林を抜けると、目の前に見えるピークが頂上で、最後の登りを終えて、一〇時四〇分に到着である。



(新百姓山山頂にて)

ここでも『チャレンジ4000』の横断幕の前に記念撮影。重廣さんは午後四時大分空港発の飛行機で帰るため、運転・同行の中心、久保両君とともに一足先に下山する。残ったものはゆっくりくるいだあと、昨日と同じように往路を引き返す。昨日ほど足下の

危いところはないが、急な下りは慎重にゆっくりと歩をとり、雪道歩きにも慣れてきたようで、確実に下っていく。途中で正午を過ぎたが、昼食は下山後のとることにして休まずに下る。一二時五〇分杉ヶ越トンネルに下山。そのまま木浦に戻って、温泉館で入浴した。あと、やや遅い昼食をとり解散した。

今冬最初の雪山であった。雪山は体力、技術とも経験を重ねることによって磨かれる。雪に対して弱い九州の山登りであるが、二日間は貴重な体験になったこと思う。重廣さん、また来年も一緒にしましょう。

参加者：【二日間参加】西(孝)、飯田、中野、佐藤(秀)、久保、三浦、後藤、園田、加藤、(以下会友) 石川、中島、塩月、渡辺(千)、渡辺(和)、日向(北九州支部)、

【夜と二〇日のみ参加】牧野、【夜のみ】首藤、西(あ)、



(梅路の女将の唄)

月例山行報告

九千部山(848m)
石谷山(754m)城
山(494m)
(二〇月月例山行)

中野 稔

九千部山。検索の件数では、九百万。由布山では、八百万件、ちなみに九重山では四〇万件。いかに人気が良いか一目瞭然である。大分県人にとっては、人気はないが地元の人々にとっては大切で偉大で有り、母なる大地の象徴でもあり、故郷の山だ。

大分の豊後高田市の市営住宅のもみじ村の裏山、千部山(94.9m)も同様にヒット件数は四四六件で全部チェックできそう。肝心の千部山は十件位だ。地元の御老体さんたちは、紅葉公園の整備に追われていた。

一〇月二十五日(日)安部車、中野車二台で大分を午前六時に出発、七時半過ぎに鳥栖ICを出て鳥栖市牛原町(筑紫神社)を目指す。筑紫神社の前はオートキャンプ場となっていて、この広場に中野車を待機させ、安部車を九千部山山頂に走らせた。予定ではここより中腹を走る林道に車を置いて、林道く九千部く石谷く林道と回る計画であったが、林道が通行不可だった

たので予定変更したのだ。

八時三十分山頂駐車場に到着。途中通行止めと成ってはいしたが、地元の人『行けないことはない』との助言に従い強行突破を試みたが、道路決壊場所はたいしたことにはなかった。

八時四十分九千部山山頂。主役の展望台と脇役三角点が並んでいた。福岡・佐賀県境にある広い平らな山頂の、標高848mの三角点は鳥栖側に入ったところにある。



(九千部山山頂にて)

ここから安部車を筑紫神社の登山口に回してくれることになり、三人は、当初予定していなかった、九千部く石谷く城山く筑紫神社のルートをやることになった。『登山』ではなく人生初体験『下山』を安部先生のお陰で初体験する事になった。

山頂から石谷山への道はよく整

備され過ぎて、マウンテンバイクや、自転車が充分に走れる程だ。七曲峠分岐(三国峠)から五分で、九時五十分石谷山到着。自然林の樹林の中で、展望は無いが癒される空間である。



(石谷山にて)

石谷山からは、いったん九千部山頂直下の城山への下山の分岐引き返す。途中でいきなり前から自転車がやってきて驚く。「こんなところを何も、自転車で乗らなくても良さそうに」帰り道に悪戯とばかりに、倒木をわざと道に出しておいたりする。石谷山から五十分位でぶんに戻る。

ここからが下山開始だ。時は十四時四十五分。途中では大きな岩に登って童心に帰る。タコを逆さまにしたように、根本から何本も曲がりくねって延びている巨木も合った。

十二時半前に勝尾城(城山)に

登城。深い木立ちの中の広い山頂は山城のあと。五百年以上前戦国時代の武士たちが夢を追いかけ懸命に生きていた証はいまいずこ。三角点山頂で昼食休憩のあと、展望所に行つて登城客と歓談し下城。筑紫神社にて境内を見物して四阿屋駐車場に十三時四十五分到着。三時間余り周辺を散策していて時間を持て余していた安部先生は、帰りに登る山を調べていたらしく、温泉へは行かないとのことと別れた。

山に登る以上に温泉探しに苦勞を余儀なくされた。ようやく行き着いた吉野ヶ里温泉卑弥呼の湯は2003年10月24日オープン。吉野ヶ里(城山展望台にて)



里遺跡とあまり関係ないような土地に、地下一、〇〇〇mから汲み上げられたお湯に「卑弥呼の湯」とはなんと強引に名づけられていると思えない。でも設備的

にはかなり凝っていて、露天風呂にはたくさん石が配置され、視覚的にも温泉気分が十分に満喫できる。また風呂もエステ等多彩な浴槽が施されている。単純弱放射能泉(低張性弱アルカリ性低温泉)とうたっているが、成分表は記憶にない。

参加者：安部、飯田、遠江、中野

女鞍岳(632m) 音岳(657m) 観

(二月月例山行)

牧野信江

十一月十五日(日) 午前五時に中野さんの車で石川さんと乗ってサニーを出発。別府で飯田さんと、遠江さんが合流し、今月の山行はこの五人だ。別府から高速に入り、九重インターを出て国道三八七号を宝泉寺温泉をから熊本県へ。道の駅小国を経て国道四四二号で再び大分県に入り上津江村を通って兵戸峠を越えて再び熊本県へ入って菊池市へ向かう。

今月の目的の山は女鞍岳と観音岳だ。両方とも熊本百名山に入っている。菊池カントリークラブ・ゴルフ場を挟んだ位置に二つの山

はある。

三八七号の立門のT字路から西に約三、五km先を右へ上がって行く。菊池カントリークラブへ行く道だ。その途中に「女鞍岳登山口」の案内板がある。そこに車を止めて八時に出発する。

民家の横を通り、いったん谷に下ってスギ林を登っていく。谷間の紅葉がきれいだ。スギ林の中でシイタケが栽培されている。スギ林を登るとアスファルト舗装の道に出て、これをしばらく行くと分岐があり、案内標にしたがって手左に林道を登る。コンクリートの舗装の道をまたしばらく登ると右に『登山口』と書いた木の輪切り(中野さんがバームクーヘンと表現した)の案内標が吊してあった。ここから山道に入った。傾斜が急になり、両側の木につかまりながら登っていく。九時に山頂に着いた。三角点はないが展望はよい。そばに石の祠がある。遠くに見える少し高いのが鞍岳だという。こちらが女鞍岳だ。地図上の女鞍岳本峰はもう一つ奥だという。行ってみるようになった。少し下ってひと登り、五分程度のところだが、何も無い、何も見えないのだが、頂上だった。その先は「自然の家」の案内標がある。引き返して往路を下る。車に九時五十分着。次は観音岳だ。立門のT字路にあるスーパーで昼の鍋料理の材料を買って、朝来た道を引き返して約3kmのところから観音岳の登山口に向かって入る。一〇時二五分、古い林道に鎖のゲートがあるところから山道を登る。登山道は良く整備されている。途中には大きな岩があった。山頂手前はかなり急な登りだ。十一時に山頂到着。六五七m、ここにも三角点はない。しかし展望は素晴らしい。八方ヶ岳が近くに見える。反対側にはゴルフ場をはさんでさつき登った女鞍岳が目に見える。



(女鞍岳にて)

下山は観音池へのルートを帰ることにした。山頂直下はかなり急な下りだが、あとは歩きやすい道で良く整備されている。少年自然の家が近くにあるため、女鞍岳とともに良く登られる山なのだろう。所々にはオリエンテーリングのチェックポイントがある。途中にあった天狗杉(巨大で根本がいくつも分岐して曲がった)でターザンごっこをして楽しむ人もいた。その下の天狗岩では登って遊ぶ人も

いる。観音池はわずかに水があるだけでほとんど干あがっていて、趣はない。池から馬見野の集落に出て、車道を歩いて車をおいている登山口に一二時に着いた。

この道路端の空き地でシシ鍋を始める。猪肉はいつもの石川さんが持ってきてくれたものだ。野菜などは現地調達ということで、途中のスーパーで買ったもので、遠江さんの手際よい調理。青トウガラシを入れたり、途中の道端で誰かがひとつ失敬した柚の皮を刻んで入れたり、ひと味違う鍋だ。牛乳パックをまな板にしてしま



アイディアに驚いた。二時間を食事にあてる。帰りには上津江村の佐藤秀二さん宅に寄ったが留守だった。たち寄ったしるしに、トラックの荷台にあったサツマイモをみんなでひとつづつ頂いて帰る。そのあと、

小国町の「峠の豆腐屋」に寄って豆腐と油あげを買った。天氣に恵まれ、美味しいシシ鍋をおなかいっぱい頂いて、気持ちの良い楽しい山歩きでした。

参加者：飯田、石川、遠江、中野、牧野

視覚障害者支援登山大会を終えて

佐藤善則

山を愛する多数の方々の参加をいただき、第十五回視覚障害者支援登山大会を去る十一月八日(日)野津原町の宇曾山(六四四m)で、秋晴れのもと、盛大に開催することが出来ました。

目の不自由な方と健常者が共に手をたずさえて山に登ることによる、相互理解と交流を深める場として定着しようとしています。この登山大会は、大分市視覚障害者協会の梅木龍男氏が大分府内山岳会会長佐藤雅司先生(故人)との会話で「視覚障害者が皆さんと一緒に登山できるといいねえ」とおっしゃった一言で実現することになりました。

第一回は平成三年一〇月二〇日、玖珠町の万年山で実施されました。

一回目の支援登山は無事終わりましたが、反省点もいくつかありました。目の不自由な方はパンプスや草履、サンダルなどに、弁当や水筒は手さげといういでたちでした。次回からは履き物は登山靴、荷物はザックに入れて手には何も持たないように徹底して頂くことにしました。また支援者も、初めて目の不自由な方の介添えで疲れがたまっていましたので、支援者を三倍以上に増やして欲しいと要望もあり、次回は大々的に募集することにしました。ところが、登山経験のない人や、子供連れの家族もあり、支援者を支援しなければならぬ場面があったり、いろいろな経緯もありました。



第一五回大会の今年も、目の不自由な方一三名、支援者三六名、計四九名の参加者でした。支援者は、ボランティアみちの会、大分

工業高校山岳部、大分大学学生寮の寮生、大分商工会議所の国際交流員(韓国人とアイルランド人)など、今年から日本山岳会東九州支部の会員も参加してもらうことになりました。

開催当日、野津原ののびゆく丘駐車場に午前九時に集合。名簿を配布して三班に分かれ、各班長が点呼や目の不自由な方と支援者の確認して出発します。三〇分に休憩してパートナーを交替。山頂を目ざしながら遅い紅葉の説明や、ドングリや山芋のムカゴを手にとりてさわるなど、和気あいあいの登山でした。皆さま、ご支援ご協力をいただきありがとうございました。

七年山(1032m)

安部可人、久保洋一

突然、久保君からの誘い、先日、佐土原、田ノ戸へ同行してくれて、断れず、行きたくもあつた。近頃膝痛あり、前々日の町田バーネット牧場近くの三角点探し、もうこれくらいがよいのだが……。

藤河内入り口に一軒家が地図にある。昔、エノハ釣りでこの民宿に泊つたが、今は更地。ここが改修された

奥ヶ迫林道(普通車OS)の入り口。二又沢のプレハブ小屋(作業中)前に駐車。すぐ二度沢を渡り、倒木植林の中を南へ沢沿い、高度六〇〇mで、ほぼ東へ向かう尾根(最短ゆるいコースで、久保七五〇mまで下見済み)へ左折。左は荒れた植林、右は切れ落ちた谷。中央のヤブ尾根を行くしかない。ひどいヤブを避けて、高度八〇〇mあたりで一度きびしい植林の急登二〇分。A級の猛烈なやぶや危険な岩場はない

展望地点が二ヶ所あり、木山内岳の稜線の紅葉はまだはやい。七年山が見えたようだ。高度九〇〇mから気持ちのよい天然林のヤブ尾根数分、もうナタは不要。最後の急登、左側は転落の心配、右の鞍部もきびしい。立木頼りの中央突破。急に脱力感、ヨーカンとボカリスエツトを捕給。やっと主稜線到着。左(六〇目)で一番高い地点(ケルン)を七年山とする。三角点なし。東方向に初めてテープ発見、好奇心で三分下ってみた(きびしい飯田ルート?)。また、真北に久保君たちが通った桑原山からの八〇六經由桑原林道への下山ルートも確認した。証拠写真をとり、早々と下山。紙テープ回収して、何も残さず。

5ヶ所、N、E データはGPSで(地形図：木浦鉱山、実施日平成二十一年一〇月二三日、往四時間復二時間)

アルプス

旅行記④

星子貞夫

7月29日

ヨーロッパの鉄道最高地点を走るユングフラウ鉄道は、スイスを訪れる人なら必ず一度は乗っている。

2061mのクライネシャイデックから3345mのユングフラウ・ヨッホまでアイガー、メンヒの山にトンネルをぶち抜いて大きく右にカーブして走っている。その終点がユングフラウ・ヨッホである。クライネシャイデックを発車した電車はアイガー・グレッツチャー駅を過ぎると、すぐにトンネルに入る。次にアイガー・バント駅にとまる。ここで乗客は全員降りて岩壁に張られたガラスの展望所に行き眼下に広がるグリーンデル・ヴァルトの町をながめる。この穴はトンネルを掘削するときに出る岩屑を廃棄するために開けられた穴である。次にアイス・メイヤーの駅で下車しフィッシャー氷河をガラス越しに眺める。ここには氷河に出るための人道用トンネルが数本あり、氷河に降りることができない。氷河の高さによりどのトンネルが良いかを選ぶ。アイガーのミッテル・レギー山



見上げる高さに有る。そして其の雪渓の端に添って一筋の雪の道がはるかオーバー・メンヒヨッホに続いている。

出口付近は安全なので観光客もまばらに居る。犬糞やスキー客もいる。

オーバー・メンヒヨッホにオーバー・メンヒヨッホ小屋がある。歩いて片道一時間の行程である。気温が上がって雪面がシャーベツトとなって歩きにくい。平に見えるけれど結構な上りである。各自三々五々オーバー・メンヒヨッホ小屋をめざす。小屋の床は半分空中に飛び出している。かつてメンヒに登った時一泊した。今日は客の数が多し。食堂でビールその他を注文して休憩し帰路につく。クライネシャイデックで電車を乗り換える頃夕立があり雷が轟いていた。



ネンの谷に電車を下りさらにケーブルと電車を乗り継いで対岸のミューレン1645mに行く。ミューレンは猫の顔ほどの小さな部落で10分も歩けば村を突き抜けてしまふ。その村はずれに立派なロープウェイの駅がある。

7月30日 「スイスに来てシュルトホルン3970mに登るには、ローマに行つて法王に逢わざるが如し。」なんと大それた宣伝である。これを読んでシュルトホルンを知った。1990年の夏のことである。当時OOTの映画は観ていたがそのロケ地がシュルトホルンのピッツグロリアとはしらなかった。そして一時建設費用が不足して中断していた。OOT撮影の為に映画会社が資金をだして完成させた。映画のお蔭で今日の栄華がある。ウエンゲンからラウターブルン

が忘れられない。ウエンゲンの最後の夜坂本さんが抹茶をたててくれた。パンとバターとワインで味覚が狂った舌に日本の伝統の味が染み渡った。夜町に出て買い物をする。会社の社長にナイフと、次男の初孫に木製の動物のパズルをかった。高台の教会からみる村の明かりが幻想的であった。

7月31日

長いと思つたアルプスの旅も遂



に終わった。終わってしまうと物足りなくもあり、早く家に帰りたい。非日常の世界に心を遊ばせる。家に帰って三ヶ月もすると、またどこかに出かけたくなって気もそぞろである。帰路はスイス国鉄でブリエンツ、ルツツェルン、経由でチューリッヒ国際空港に着く。

沢山の湖の畔を走る電車の旅は座席に座る暇もなくカメラのシャッターの押しっぱなしである。チューリップ国際空港は改築され土産物店が沢山ある。最後の買い物をして荷物が85kgになった人がいたらしい。それでも飛行機の超過料金は掛からなかった。なんとラッキーな旅でした。

あるかも知れない。写真は布谷氏、城全氏からも拝借した。以上

8月1日

帰路は飛行時間がとても短かった。飛行中慢性的寝不足であったので、飛行中は殆ど寝ていて、食事の時だけ目を覚ました。気がついたら仁川空港であった。大分駅で家族の方々と再会の光景があたかも修学旅行から帰った中学生が家族と出会う風情を感じて微笑ましかった。

記

この度の旅は四人を除いて初めての方ばかりでしたが、皆山の水を飲み山に親しんで居られる方ばかりなので、すぐに打ち解けて良かった。皆さんの寛容と忍耐に助けられました。特に布谷夫人には堪能な英語で助けられました。事故も無く旅を終えたことを感謝しています。

このレポートは私の主観で書いてある。皆様にはそれぞれの思いがあると思う。このレポートを軸にして更に各自の思いを綴れば良い思い出の書となるでしょう。

私は旅に出ると日記を付けるが今回は殆どなにも書いて無く、記憶による所が多いので記憶違いが

あるかも知れない。写真は布谷氏、城全氏からも拝借した。以上

期日 2008年7月15日〜8月1日

メンバー 星子貞夫、今山アヤ、

福田かつ子、池辺幹夫、池辺明美、

布谷英生、布谷ゆきえ、伊賀上清香、永井邦子、坂本映子、城全統

一、雪野 敬称略 佐喜子 以上

コース モンブラン山群、バリ

ス山群ツエルマツト、ベルナーオ

バーランド三山、ウエンゲン、

シュトホルン

前号で

「イギリス湖水域」

（以下次号へ）
となっていました。ミズプリントで前号終了でした。

九州脊梁山地 縦走の記録 （その三）

下川 幸一

本日のコースは向霧立山地の南、白鳥山と銚子笠の鞍部に古い峠道の県分越があり、県分山地と呼ばれている地域である。白鳥の山頂は自然林が残り、ブナの巨木やヤマシヤクヤクが目立つ。銚子笠はアブローチが長く、倒木も多行道もわかりづらいため、慎重な行動が必要となる。

夕べは夜中にあらがれがテントをたたき、本日の天候が心配だったが、朝の天気は曇りで一安心する。四時起床、五時五分に椎葉越を出発。まだ薄暗く濃霧の中、ヘッドライトを点けてスズタケのアップダウンの稜線を進み、二五分で舗装道路が横切る峰越峠に着く。到着と同時に一同「アツ」と驚く。何と烏帽子岳登山口の表示板の下に二つ三本、一と二本の水と見覚えのある字の書き置きがある。安部先生がわざわざここまで運んでくれたのだ。感謝、感謝。

本日は白鳥山のカラ谷分岐の下り、水を補給して行く予定だったが、そのアルバイトが省けたのだ。（あとで分かったことだが、カラ谷の水は最近枯渇していて給水できないとのこと、この水がな

あった。初めて親子の鹿四頭とも出会った。しばらく進むと「平家残党左中将平清経住居跡」の標識あり。源氏の平家討伐のためこの場所です。源氏の平家討伐のためこの場所です。源氏の平家討伐のためこの場所です。

七時八分に白鳥山山頂（1638.8m）に着く。写真などを撮っていると一人の女性が登ってきて、さつさと銚子笠方面へと消えていった。こんな早朝、しかも女性がたつた一人でこの辺境の山を歩くと、かなり山慣れた人だろう。

我々も銚子笠へ向かう。出発の樹木に囲まれた快適な縦走路を進んでいたが、時雨岳の方向に進んでいるのに気がつき稜線まで戻り、銚子笠分岐の道標で方向を再確認。約二〇分のロス。銚子笠への道は倒木が多くて歩きにくく、道もわかりにくい。順調に進む。銚子笠の手前数分のところで、白鳥山頂で会った女性が引き返してくるのに出会った。九時二分に銚子笠山頂（1488.9m）に到着。

銚子笠から江代山一帯は九州脊梁山地の最も奥深い山域である。しかもこの区間には登山道がなく、最も心配な区間の一つである。この県境稜線では境界杭を頼りにGPSで確認しながら慎重に進む。杉林の県境稜線のアップダウンを繰り返して、水上の三角点（2277.7m）を過ぎ、次の魚返り三角点（2144.4m）の南斜面の伐採地で軽い昼食。眼下に不土野の谷の民家が見えてくる。



（白鳥山にて）

(銚子傘山頂にて)



れば行動食で何とかなるが、水は難しい。飲む以外は使わないようにして辛抱しながら進むことにする。明日登る予定の江代山がまだはるか遠くに見える。

林道から再び稜線にとりつき、スギ植林の斜面の境界杭を確認しながら進む。稜線の緩い登りを終えたところにある三等三角点の川ノ口(139.6m)を一五時通過。放射電波塔を過ぎ、稜線から一気に急斜面を下りる。黄色や白・黒の境界杭を必死に探しながらヤブコギの連続で、スギ林の中の平らな場所に着いた。

不土野峠へは県境稜線の長いアップダウンのあと、五〇分間長い登りに苦しめられて、ようやく峠に出る。銚子笠から四時間の予定が、一度もコースを間違えず二時間四五分で到着する。

一休みして峠の南面の牧草地から稜線にとりつく。ここも長い稜線登りで三角点・古崎峠(266.7m)をようやく登り越し、下ったところにある林道で一休み。

三人とも暑さと疲労で水もずいぶん減っている。確かめてみると残りの水は三人で合わせて三リットルしか残っていない。飯田：「水場は江代山を越えるまでではない。引き返すか、行くか、決断する最終リミットだ。これ以上進むと引き帰せなくなる。どうする」二人：「何とかなる。行きたい」飯田：「じゃあ行く」食料はいざとな

手前の幕营地 15時30分
正味歩行時間(休憩・ロスタイム除く) 〓 八時間四三分
歩行距離 〓 約15.4km

九重の自然を守る 報告

甲斐良次

二〇〇九年度の日本山岳会・自然保護全国集会在、平成二十一年六月二〇日(土)・二一日(日)秋田市で開催され、これに参加しました。

この集会は秋田支部創立五〇周年記念の集会和共同で開催されました。初日の二〇日において、午前中は支部報告、午後は全体集会以して。その中で、小生の支部報告は午前中の部において一番最初でありました。その題名「九重の自然を守る、野焼きと清掃登山、登山道の整備」で報告を行いました。以下その報告の概要です。

新しい若芽を与えるために始めたのであります。さらに、ダニや害虫を駆除する効果もありました。明治になってからは、山頂あたりが国有林となり、野焼きも今までのように行くと国有林に延焼する恐れが生じ、防火線が築かれませんでした。昭和の終わり頃になるとアメリカ、ニュージーランドなど外国から牛肉が輸入されるようになり、その影響で、国産牛も安くなり、牛馬を飼育する人が少なくなり、その上老齢化が進み野焼きが絶えるようになりました。平成になってから、野焼きをしないとかやがなくなり、それまであった自然が変わる危険が認識され、また、観光面と高原の植生保護のため野焼きを復活するにいたりました。

「九重の自然を守る、野焼きと清掃登山、登山道の整備」

●野焼き

九重山一帯の野焼きは江戸時代からのものです。そもそも、牛馬に

を行いました。野焼きは三月中に行わないと、四月になると強風が発生するので危険度が増します。又、この種の作業で最も注意を払わなければならないのは乾燥注意報であります。地形状態を熟知した経験のある地元の方が作業にあたり注意を払っています。

野焼きの後に残る、黒い焼跡には黄スミレが点々と咲きます。カヤ・ササの美しい新芽も出始めます。又、その後はフウロウ草、マツカゼ草、ワレモコウもぼちぼち芽を出してきます。

●清掃登山・登山道の整備

復活する際には、九州電力、九重観光協会、消防団の協力、さらに、自然を守るボランティアが集まり野焼き実行委員会が出来ました。今年度は一目山周辺において一五ヘクタールを三月二十七日、約六〇名ほどで焼きました。泉水山山麓においては約六〇ヘクタールを三月二十九日、一二〇名ほどで焼きました。ラムサール条約に指定されている坊がつるとタデ原湿原三五ヘクタールは四月八日、一五〇名程で作業を行いました。

今年度は湯布院の野焼きで死者が四名も出る事故があったので、九重山一帯の野焼きでは、その地の経験者を招き入れて火入れ作業

今年度は湯布院の野焼きで死者が四名も出る事故があったので、九重山一帯の野焼きでは、その地の経験者を招き入れて火入れ作業

飯田勝之

里山の稜線歩き

(その11)

犬飼町にある里山稜線を二つ紹介しよう。ここは郡部と言っても大分市に近い里山だしアプローチも良い。

「久原」(165.5m)

犬飼の市街地の対岸(大野川右岸)の高台にある(ん)もりとした森を持つ丘だ。この丘は大野川とその支流の川と、野津川とその支流の西寒田川に囲まれた四角形の台地の南の端近くにある小ピークである。付近は植林地と竹林と天然二次林とが混在する大分県中部の典型的な里山であるが、三角点があるところはかなり広い範囲で広葉樹の二次林となっている。ここに登るのには、定かな道はないが北の稜線からたどると南の林道をつめて登ると二つのルートが考えられる。私は北からのコースをすすめたい。稜線歩きを楽しむのならこちらの方がおもしろい。

国道一〇号線の犬飼橋東の交差点から左(東)に、斜めに久原の台地上がる市道に入り、小学校と中学校の間を通過して集落の中を北

に抜ける。緩やかな峠を過ぎて、浅い谷から少し上ったところで、国道から約一・五kmの地点がとりつきに良い。左は山林で右(南)は山を広く掘削した空き地がある。この横に車を止めて南側の空き地を横切り一〇〇m奥の稜線のヤブにはいる。入り口はヤブだが林に入るとその奥は灌木の疎林で、心地よい稜線歩きが始まる。カシナラ、クヌギ、タブ、モチ、サクラ、ツバキ、アセビ、ネズミモチなどの中、林床には下草もなく、落ち葉が敷き詰められて歩くのが楽しい。

広い稜線を南に向かって緩く登っていき、さらに登りながら北向きへと稜線はカーブしていく。やや急な登りが二、三分続き、ほどなく緩くなり、さらにやや登るとメダケが多くなってきた。メダケのブッシュを分けながら登ると、市道から約二五分の登りで山頂に達する。

広い平らな山頂のほぼ中央のメダケのブッシュの中に三等三角点がある。注意すべきは、帰路を見失わないように目印することだ。南ルートは学校の直ぐ北の四つ辻を東に入り、久原林道を終点まで行ってあとは緩斜面を登って山頂に至ることになる。

参考タイム：市道↓二五分
↓山頂



(久原)

地形図：25, 0000分の1：犬飼

「若山」(191.1m)

野津川の支流で西寒田川と千塚川の両川に挟まれた稜線の、南の端に近いピークである。この一帯の山林は植林地と自然林が混在しているが、この稜線付近はかつて薪炭林として伐られたあとが自然再生されて、シイ、カシなどの照葉樹林が極相状態にまで生長しているのがみられる。三角点があるところはシイ、カシ、ナラ、クヌギ、アセビ、ヒシヤカキ、クロキなどの林床にコシダがみられる。

野津町木所の国道一〇号線の旧道から、川沿いの旧旧国道に入りさらに平野に向けて入ると旧国道から約1kmの、集落入り口の道左脇に庚申塔(4基)がある。ここより左上の畑地の斜面を通る農道を上がり、約400m先の小さな三叉路から右に畑の際の道

を登る。畑地と山林の境を通る細いコンクリート道を登ると、三分足らずで畑地の一番上に至り、道はそこから右に大きく曲がって集落へと下るので、ここより反対に山に入る。

古い道が左ヒノキ林、右照葉樹林の境を斜めに登っている。三、四分ほどで右に折れて、照葉樹の林の中の、落ち葉のクツションの良い心地よい緩やかな登りだ。両側は素晴らしいシイ、カシ林である。

やがて、道が平らになり、その向こうは緩い下りになる。その右手上が山頂だ。灌木の急斜面を直登していくと、古い道から三分足らずで四等三角点のある山頂につく。山頂は中低木の灌木だが、途中の古い山道の両側に見られるシイ、カシの林は見事だ。



(若山)

地形図：25, 0000分の1：犬飼

お知らせ

二月月例山行のご案内

- ・月日：二月二一日(日)
- ・目的地：千灯岳(665.8m)、鷲巣岳(436.5m)と赤根温泉(国東市・赤根)
- ・出発：二月二一日(日) 午前六時サニー出発
- ・現地集合：午前七時千燈

三月月例山行のご案内

- ・月日：三月二〇日(土)、二一日(日)
- ・目的地：篠山(1064.6m)三本杭(1225.7m)と津島安らぎの里温泉(愛媛県・愛南町)
- ・出発：三月二〇日午前一時サニー出発
- ・午前二時四〇分白杵港発

四月月例山行のご案内

- ・月日：四月二一日(日)
- ・目的地：上湯沢(3332.5m)、下湯沢(1084.8m)と釜ノ口温泉(九重町)
- ・出発：四月一八日(日) 午前六時サニー出発
- ・現地集合：吉部坊がする登山口 午前七時三〇分

支部役員会と五〇周年実行委員会との開催

支部役員および五〇周年記念事業実行委員の主、副担当者はお集まり下さい。

- ・日時 二月五日(金) 午後六時から
 - ・場所 大分市府内町「コンパルホール」
 - ・実行委員(主・副担当者)
 - 記念講演会 (梅木)
 - 記念式典 (宇津宮)
 - 記念祝賀会 (加藤)
 - 資料展示会 (佐藤(浩)・中野)
 - 記念山行(国内)(野村、緒方)
 - 記念山行(海外)(甲斐(良)・星子)
 - ・記念誌作成 (安東・久保)
 - ・参加記念品 (甲斐(一))
 - ・記録 (首藤)
 - ・総務 (安藤(幹)・飯田)
 - ・事務局 (西・阿南)
- ※ 各主・副担当者ははこれまでの準備状況、今後の予定等を報告下さい。

定例総会の開催予定について

・日時：四月一七日(土) 午後六時より
 ・場所：大分市府内町「コンパルホール・視聴覚室」

会員、会友の皆さん、今年の総会は五〇周年記念行事の実施など、大事な年度の始まりですので、あ

ここは何処？

・この写真は何処から何処を撮ったものでしょう？
 ・お分かりの方は事務局まで はがきでお知らせ下さい。



らかじめ予定しておいて是非ご出席下さい。

韓国山岳会・蔚山支部との交流登山会について

今年には蔚山支部の皆さんを日にお迎えする番です。韓国の方々のかねてよりの希望で、霧島連山の韓国岳などで実施の予定乗るタイプなので・・・です。会員・会友の皆さん、万障繰り合わせのご参加を予定しておいて下さい。

実施月日：五月 日(土)

日(日)

詳細：詳しい日程等は後日はがきでお知らせします。

後記

- 秋の長期予報では暖冬予想が、年明けとともに厳しい寒波で、そのあと三月のような暖かさ。そしてまた真冬の寒波と、何とも荒っぽい冬の天気のごころ。
- 春の到来かと思つて膨らみかけたフキノトウが、あわてて固まって雪に埋もれているのが、とけた雪の下から見えていました。
- まだ大分先のことと思つていた、五〇周年記念事業の実施も、もうことしの秋に迫ってきました。東九州支部の節目の年になりそう今年・・・。
- 新年早々に本部のある役員の方から、支部報に記されている山行報告を読んで、我が支部の活発な登山活動に激励の言葉を頂きました。
- 投稿されている以外にも、も

日本山岳会東九州支部報 第48号

2010年(平成22年)1月25日(月)
 発行者 梅木 秀徳
 編集者 飯田 勝之
 発行所 〒870-0021 大分市府内町1-3-20
 サニースポーツ内 西 孝子方
 TEL・FAX 097-532-0926
 題字 (故) 佐藤正八

ちろんたくさんさんの登山活動がなされていく訳です。出来ればもっとたくさん載せたいと・・・、霧島岳が出来ます。褒められれば調子にもっと寄せて下さい。簡単な記事でも結構ですので、編集部までお願いします。できればメールで送って下さると有り難いです。その場合は(Eメールアドレス= yama.tomoki@ari.big.jp)まで。(K・I)